

夜叉ヶ池

泉鏡花

場所 越前国大野郡鹿見村琴弾谷  
時 現代。——盛夏  
人名 萩原晃（鐘楼守）  
百合（娘）  
山沢学円（文学士）  
白雪姫（夜叉ヶ池の主）  
湯尾峠の万年姥（眷属）  
白男の鯉七  
大蟹五郎  
木の芽峠の山椿  
鯖江太郎  
鯖波次郎  
虎杖の入道  
十三塚の骨  
夥多の影法師  
黒和尚鯨入（剣ヶ峰の使者）  
与十（鹿見村百姓）  
その他大勢  
鹿見宅膳（神官）  
権藤管八（村会議員）  
斎田初雄（小学教師）  
畑上嘉伝次（村長）  
伝吉（博徒）  
小烏風呂助（小相撲）  
穴隈鉦蔵（県の代議士）  
劇中名をいうもの。——（白山剣ヶ峰、千蛇ヶ池の公達）

みくにだけ ふもと くれむ  
三国岳の麓の里に、暮六つの鐘きこゆ。——幕を開く。

はぎわらあきら しらが しょうろう せきよう  
萩原晃この時白髪のつくり、鐘楼の上に立ちて夕陽を望みつつあり。

つた こけ おもむろ  
鐘楼は柱に蔦からまり、高き石段に苔蒸し、棟には草生ゆ。晃やがて徐

に段を下りて、清水に米を磨ぐお百合の背後に行く。

晃 水は、美しい。いつ見ても……美しいな。

百合 ええ。

その水の岸に<sup>あやめ</sup>菖蒲あり二三輪小さき花咲く。

晃 <sup>きれい</sup>綺麗な水だよ。<sup>ほほえ</sup>(微笑む。)

百合 (白髪<sup>びん</sup>の鬢に手を当てて) でも、白いのでございますもの。

晃 そりゃ、米を磨いでいるからさ。……(<sup>かまち</sup> 框の縁に腰を掛く) お勝手働き御苦労、せつかくのお手を水仕事で台なしは恐多い、ちとお手伝いに行こうかな。

百合 <sup>よ</sup>可うございますよ。

晃 いや……お手伝いという処だが、お百合さんのそうした処は、咲残った菖蒲を透いて、水に影が映したようでなお綺麗だ。

百合 存じません。

晃 <sup>ほ</sup>賞めるのに怒る奴<sup>やつ</sup>がありますか。

百合 おなぶり遊ばすんでございますものを。——そして旦那様<sup>だんなさま</sup>は、こんな台所へ出ていらっしゃるものではありません。早くお机の所へおいでなさいまし。

晃 鐘<sup>つ</sup>を撞く旦那はおかしい。実は<sup>ごんすけ</sup>権助と名を替えて、早速お飯<sup>まんま</sup>にありつきたい。何とも可<sup>おそろし</sup>恐く腹が空いて、今、鐘を撞いた<sup>しゅもく</sup>撞木が、杖<sup>つえ</sup>になれば可<sup>い</sup>いと思った。ところで居催促<sup>いざいそく</sup>という形もある<sup>かた</sup>。

百合 ほほほ、またお極<sup>きま</sup>り。……すぐお夕飯にいたしましょうねえ。

晁 手品じゃあるまいし、磨いでいる米が、飯に早変わりはしそうもないぜ。

百合 まあ、あんな事を——これは翌朝あしたの分を仕掛けておくのでございますよ。

晁 翌朝しょたいの分——ああ、お所帯もち、さもあるべき事です。いや、それを聞いて安心したら、がっかりして余計空いた。

百合 何でございますねえ。……お菜かずも、あの、お好きな鳴焼しぎやきを上げますから、おとなしくしていられしやいまし。お腹が空いたって、人が聞くと笑います。

晁 (縁を上る) 誰に遠慮がいるものか、人が笑うのは、ね、お前。

百合 はい。

晁 お互いに朝寝の時——

百合 知りませんよ。(莞爾俯向く。)

晁 煩うるさく藪蚊やぶつかが押寄せた。裏縁で燻いぶしてやろう。(納戸、背後うしろむきに山を仰ぐ) ……雲の峰を焼落した、三国ヶ岳は火のようだ。西は近江、北は加賀、幽かすかに美濃みのの山々峰々、数万の松明すまん たいまつ つらを列ねたように早ひでりの焰ほのおで取巻いた。夜叉ヶ池やしやへも映るらしい。ちょうどその水の上あたり、宵の明星の色さえ赤い。……なかなか雨らしい影もないな。

百合 ……その竜すが棲む、夜叉ヶ池からお池の水が続くと申します。この清水も気のせいやら、流ながれが沢山瘦たんとやせました。このごろは村方で大騒ぎ

をしています。……暑さは強し……<sup>あなた</sup>貴方、<sup>からだ</sup>お身体に<sup>さわ</sup>触りはしますまいかと、——めしあがりものの不自由な片山里は心細い。私はそれが心配でなりません。

晃 <sup>ながれ</sup>流が細ったって構うものか。お前こそ、その上夏<sup>い</sup>痩せをしないが可い。お百合さん、その夕顔の花に、ちょっと手を触ってみないか。

百合 はい、どういたすのでございますか。

晃 花にも葉にも露があろうね。

百合 ああ冷い。水の手にも涼しいほど、しっとり花が濡れましたよ。

晃 世間の人には金が要ろう、田地も要ろう、雨もなければなるまいが、我々二人<sup>い</sup>活きるには、百日照っても乾きはしない。その、露があれば沢山なんだ。<sup>おもて</sup>（戸外に向える障子を<sup>とぎ</sup>閉す。）

百合 貴方、お暑うございましょう。開けておおきなさいましても、もう、そちこち人も通りますまい。

晃 何、<sup>あらたま</sup>更<sup>とじこ</sup>って、そんな心配をするものか。……<sup>ひといぶ</sup>晩方閉込んで一燻し燻しておく<sup>と</sup>と、蚊が大分楽になるよ。

<sup>かやり</sup>時に蚊遣の煙なびく、

学円。日に焼けたるパナマ帽子、背<sup>おちつき</sup>広の服、<sup>じんてい</sup>落着のある人体なり。風呂敷包<sup>はす</sup>を<sup>しよ</sup>斜に背い、<sup>きやはんわらじばき</sup>脚絆草鞋穿、<sup>ステッキ</sup>杖<sup>こうもり</sup>づくりの洋傘をついて、鐘楼の下に出づ。打仰ぎ鐘を眺め、

学円 今朝、明六つあけむの橋を渡って、ここで暮六つの鐘を聞いた。……

お百合はざる箆に米をうつす。

学円 やあ、お精が出ます。（と声を掛く。）

百合 はい。（見向く。）

学円 途中、なわて たけやぶ 暇の竹藪の処へ出て……暗くなった処で、今しがた聞きました。時を打ったはこの鐘でしょうな。

百合 さようでございます。

学円 音も尊い！……立派な鐘じゃ。つりがねどう あが 鐘楼へ上ってみても差支えはありませんか。

百合 ざる（箆を抱えて立つ）ええ、大事ござんせん。けれどもあなた ごじょうだん 貴客、御串戯に、お杖やなんぞでたた いけ お敲き遊ばしては不可ません。

学円 すいか 西瓜を買うのではありません。決してすいか 敲いてはみすまい。（笑う。）

百合 御串戯おっしゃいます。……いいえ、いたずら 悪戯を遊ばすようなお方とは、お見受け申しはしませんけれど、その鐘は、明六つと、暮六つと、夜中うしみつ 丑満に一度、——三度のほかは鳴らさない事になっておりますから、失礼とは存じましたが、ちょっと申上げたのでございます。さあ、どうぞ御遠慮なく、上って御覧なさいまし。（夕顔の垣根について入んとす。）

学円 ああ、ちょっと……お待ち下さい。鐘を見ようと思いますが、ふとことば 言を交わしたを御縁に、余りぶしつけ 不躰がましい事じゃが、茶なりと湯なりと、一杯お振舞い下さらんか。

百合 お易い事でございます。さあ、<sup>あなた</sup>貴客、これへお掛けなさいまし。

学円 御免下さいよ。

百合 <sup>まこと</sup>真に見苦しゅうございます。

学円 これは——お寺の<sup>くり</sup>庫裡とも見受ません。御本堂は離れていますか。

百合 いいえ、もう昔、焼けたと申しまして、以前から、寺はないのでございませう。

学円 鐘ばかり……

百合 はい。

学円 鐘ばかり……成程、ところで西瓜の一件じゃ。（帽子を脱ぐ、ほと

<sup>ていはつ</sup>んど剃髪したるとき一分刈の額を撫でて）や、西瓜と云えば、内に

<sup>まくわうり</sup>甜瓜でもありますまいか。——茶店でもない様子——（見廻す。）

<sup>かたやまが</sup>片山家の暮れ行く風情、<sup>ゆ</sup>茅屋の<sup>かやや</sup>低き納戸の<sup>ほかげ</sup>障子に灯影映る。

学円 この上、晩飯の御難題は言出しませんが、いかんとも腹が空いた。

百合 ほほ。（と打笑み）<sup>うちえ</sup>筧の下に、<sup>かけひ</sup>梨が<sup>ありのみ</sup>冷してござんす、<sup>ひや</sup>上げましよう。（と夕顔の蔭に立廻る。）

学円 （がぶがぶと茶を呑み、<sup>の</sup>衣兜から<sup>ポケット</sup>扇子を取って、<sup>あお</sup>煽いだのを、と<sup>かざ</sup>翳

して見つつ）おお、咲きました。<sup>あなた</sup>貴女の顔を見るように。

百合 ええ？（聞返す。）

学円 いや、髪の色を見るように。

百合 もう、年をとりますと、花どころではございません。早く干瓢かんぴょうにでもなりますれば、……とそればかりを待っております。

学円 ナイフ 小刀をこれへお遣わし……私わしが剥むきます。——お世話を掛けてはかえって気遣いな。どれどれ……旅の事欠け、不器用ながら、梨なしの皮ぐらいは、うまく剥きます。おとおお氷よりよく冷えた。玉を削るとはこの事じゃろう。

百合 旅を遊ばす御様子にお見受け申します……貴客あなたは、どれから、どれへお越しなさいませう？

学円 な の さて名告りを揚げて、何の峠を越すと云うでもありません。御覧の通り、学校に勤めるもので、暑中休暇に見物学問という処を、遣やって歩行あるく……もつとも、帰途かえりみちです。——涼しくば木の芽峠、音に聞こえた中の河内か、(廂かわちはずれに山見る眉ひさし)峰の茶店に茶汲ちゃや女ちゃくみおんなが赤前垂あかまえだれというのが事実なら、痲瘡ほうそうの神の建場たてばでも差支えん。湯の尾峠を越そうとも思います。——落着く前さきは京都ですわ。

百合 お泊りは？ 貴客あなた、今晚の。

学円 ああ、うっかり泊りなぞお聞きなさらぬが可い。言尻いに着いて、ことばじり宿の御無心申さんとも限らんぞ。はははは、いや、串戯じょうだんじゃ。御心配には及ばんが、何と、その湯の尾峠の茶汲女は、今でも赤前垂じゃろうかね。

百合 山また山の峠の中に、嘘のようにもお思いなさいましょうが、まったくだと申します。

学円 谷の姫百合も<sup>ひいろ</sup>緋色に咲けば、何もそれに不思議はない。が、この通り、山ばかり、<sup>かさな</sup>重<sup>かさな</sup>り<sup>かさな</sup>累<sup>かさな</sup>る、あの、<sup>いただき</sup>巔<sup>いただき</sup>を思うにつけて、……夕焼雲が、めらめらと<sup>いわお</sup>巖<sup>いわお</sup>に<sup>やけこ</sup>焼<sup>やけこ</sup>込<sup>やけこ</sup>むようにも見える。こりゃ、赤前垂より、雪女郎<sup>すご</sup>で<sup>すご</sup>凄<sup>すご</sup>うても、中の河内が<sup>い</sup>可<sup>い</sup>いかも分らん。何にしろ、暑い事じゃね。——<sup>いき</sup>や<sup>いき</sup>っ<sup>いき</sup>と<sup>いき</sup>こ<sup>いき</sup>こ<sup>いき</sup>で呼吸をついた。